

荒尾譲介

帝キネ 現代映画

脚色者  
大館朝郎  
赤穂義枝  
撮影者  
同富山唯繼

主要役割

高大央  
橋森武  
則勝郎

荒尾譲介  
大館朝郎  
赤穂義枝  
間貫一  
富山唯繼  
久濱賀松嵐  
藤間林太  
野川瑞枝  
あかね格清子  
徳郎

害の父 鴨澤隆三  
同母 高千穂芳美  
大森勝氏の「春怨臘月」に次ぐ作品で  
解説

略筋——嘗ては愛知縣參事官の要職にあつた荒尾譲介も、今は東京郊外に翻譯を業として暮し始めてゐた。恩人大館朝郎の選舉運動費用に際して責任者となつた爲、選舉開典の名を以て職を免ぜられ、現在も美しき悪魔さ聲名されてゐる。高利貸赤穂義枝のために懽まされてゐた。友人間貫一は裏切られた戀の恨を金力に報讐は實現し得ず、夫の愛を得たが夫の胸は悔恨の涙に満ちてゐた。お宮は現れ、一日譲介をお宮から此の苦しみを訴へられたが、親友の女に對して唯、竊悟あるのみ答へた。竊悟の解釋に聞へたお宮は遂に狂して了つた。その篤しい姿は金力結婚を強められたお宮の両親を後悔させ、貫一の心をも解かせた。斯くて譲介の誠意ある忠告に聽つた大館朝郎は、荒尾を責め、自分が商賣を公事に投なむを止めることを誓つた。そして金を公共事業に投するのである。譲介も貫一の友情を謝しつゝ、故國に別れを告げ出だした。



「荒尾譲介」帝キネ大森勝作監督  
右より藤間林太郎と松枝鶴子。